

水野廣祐著

## 『インドネシアの地場産業

— アジア経済再生の道とは

何か? —』

京都大学学術出版会 1999年 v + 408ページ

さ たけ まさ あき  
佐 竹 眞 明

## はじめに

評者は同じく東南アジアのフィリピンに存続する地場産業について研究をまとめた [佐竹 1998] 経緯から、編集部より依頼を受け、本書を書評することになった。インドネシアに関しては理解が不十分な部分もあるものの、インドネシアとフィリピンの地場産業を比較する視点から本書を論評してみたい。また、本書から、地場産業を分析する視点を学ばせていただければと思う。

## I 本書の概要・問題設定

本書はインドネシア・ジャワ農村における長期住み込み調査に基づく労作である。調査対象は西ジャワ州バンドゥン県マジャラヤ (Majalaya) 地方の農村織布業である。国内最大規模の織布業中心地であり、著者は1984年7月から86年10月まで、バンドゥン県チカンチュン (Cikancung) 郡チルルク (Ciluluk) 村の一区にてフィールド調査を行った。詳述すると、1985年6月より村に入り、86年10月まで断続的に住み込み調査をし、その後もフォローアップし、最後の調査は99年1月とのことである。

本書は、農村工業を「地場産業」と呼び、特に、日本の地場産業に関する山崎充の議論を援用する。すなわち、日本では、特定の地域に同一業種の中小零細企業が地域的企業集団を形成し、生産販売にお

いて、社会的分業体制が見られるという。競争と共同の複雑な網の目があり、コミュニティとしての一体感があるといわれる [山崎 1977]。著者はインドネシアの農村工業でも、地域の分業や地域単位の要素が重要だという。さらに、バンドゥン工科大研究者の議論を引用し、人々の生活水準の向上を目指すプログラムでは、住民自身がプログラム実行の必要性を明らかにし、活動の企画・運営、評価も行うべきだという。これがコミュニティ・デベロップメントの基本である。こうした位置付けに基づき、本書は地場産業 (英語で community-based industry) を論じる。

本書の「はじめに」は、次のように問題を設定している。

インドネシア、ジャワの農村を歩くと、農業以外の職業で、生計を立てている人が多いことに気づく。雑貨屋、ラーメン屋、竹細工職人、レンガ職人、乗り合い馬車の運転手、祈禱師、金貸し、歌唄いなどである。こうした雑多な職業、つまり、農林漁業以外の産業 (農村内非農業部門) に従事する人が多数存在する。実際、ジャワ農村では労働人口の4割以上が非農業部門で生活の糧を得ており、村民の全所得の5割以上が一次産業以外から、獲得されている。

従来のインドネシア研究では、こうした非農業部門が等閑視されてきたという。本書はその間隙を埋め、農村工業に注目する。ただし、農業部門も分析される。非農業部門の存在は農業の発展の結果であり、非農業部門も農業構造によって規定されるからである。

こうした問題設定に基づき、著者はジャワ農村では土地なし層が多くても、農村内非農業の存在により、人々が隷属状態を免れており、小作人や農業労働者にとって、非農業部門は従属からの逃げ道と発展の契機を提供してきたのではないかという仮説を提示する。

さらに、農村工業を研究する意義として、原材料の調達や製品の流通を検討し、地域社会の経済循環や、地域経済と国民 (国際) 経済との関係を明らかにできるという。就業者数で見ても、工業部門で最も多いのが、小零細企業からなる農村工業である。

これはインドネシア工業、経済の重要な特質ではないかという。実のところ、この2点はフィリピンの地場産業に関しても指摘できる。

## II 本書の構成と論点

ここで、本書の構成を記しておこう。

### 序章 本書のテーマと方法

#### 第1部 西ジャワの地場産業産地と政府の小零細企業政策

##### 第1章 西ジャワの地場産業産地とインドネシアの小零細企業

##### 第2章 インドネシアの小零細企業政策と農村織布業

#### 第2部 調査村の織布業

##### 第3章 調査村の概要

##### 第4章 調査村地域における農村織布業の展開

##### 第5章 織布の生産規模・収益・市場

##### 第6章 零細経営の存立基盤

##### 第7章 農村金融と信用

##### 第8章 農村織布産地の就業構造

#### 第3部 織布業と農村の経済・社会

##### 第9章 農業と農村内非農業部門

##### 第10章 農村工業化と農村経済

##### 第11章 ビジネスネットワークの社会的基盤

##### 第12章 結論

詳細に織布産業を分析しながら、次の11の論点を検証している。

1. 農村工業は輸入品や都市大企業との競合によって消滅するか。
2. 農村工業が生き延び、発展するためにはどのような分業関係が望ましいか。
3. 農村工業はなぜ工場制に移行するのが困難か。
4. 1980年代の金融自由化は農村工業にマイナスの影響を与えたか。
5. 住民の多就業形態は農村工業存続にプラスだったか。
6. 農村工業は女性労働を周辺化しているか。
7. 農村内非農業部門に従事する村民の間で、貧

困が共有されているか。

8. 農業部門の発展は非農業部門の発展に結びついたか。
9. 農村工業化過程で発展する企業は近代的企業といえるか。
10. 農村工業と農村内非農業部門は農村内階層間所得分配を改善したのか。
11. 農村の社会組織はビジネス・ネットワークの社会的基盤となっているのか。

いずれも興味深い論点である。結論（第12章）に基づき、検証結果をまとめてみよう。

1. 調査地域の織物産業は、大企業製品や輸入製品より、安価な製品を製造でき、製品の需要者である低所得者層が存在したため、消滅しなかった。むしろ、低価格を維持しつつ質の向上を図ったため、中所得者層にも販路を広げられた。そうした条件がそろえば、輸入品や大工業との競合によって消滅しないという。[評者のコメント：ただし、条件がそろわなければ、消滅、衰退するわけである。]

2. 生産者や経営者が自ら商人も兼ねたりする分業関係に関して、競争力を持つ製品を製造・流通できるよう、柔軟に変化する必要がある。また、運転資金の不足に対応できるように、掛売りなどの信用関係が必要だとする。

3. 家族経営で、元入金の少ない商人の方が有利なので、農村工業は商人資本に移行する傾向があるという。[これはフィリピンと同様である。]

4. 政府プログラムの信用は限定的な役割しか持たず、機業者の小商人向けや、織物商人間の掛売り、頼母子講が重要な役割を果たしている。[これもフィリピンと類似する。]

5. 機業者は職布関連業、ベチャひき、農業労働なども兼業していることが多い。多就業形態が、機業者の乏しい売上総利益や運転資本を補い、経営の存立を支えている。こうして、住民の多就業形態は農村工業を存続させる分業構造の一要件である。[農村内の就業構造を綿密に調査した本書独自の見解であり、興味深い。]

6. 織布業と関連産業は女性に就業機会を提供して

いる。機業世帯の男性がベチャひきや農業経営に従事できるのも、女性が機業経営に大きな役割を果たしているためだろう。女性の周辺化が進んでいるとは言えない。他方、女性が実質的な経営者なのに、統計調査では夫が経営者という回答を得るため、統計上、女性自営業者の数は少なくなってしまう。

[この点はジェンダー研究の視点からも興味深い。一般に調査者も十分な観察もせず、「夫が経営担当」という答えを鵜呑みにする。調査、研究におけるジェンダー・バイアスである。]

7.クリフォード・ギアツが提示した「貧困の共有原理」については、著者は否定的である。ギアツはオランダ植民地統治下のジャワ農村では、村民に労働機会を保証し、所得の分配を可能にする労働関係や小作関係が発達し、貧困が共有されるとした [Geertz 1963]。この議論を織布産業で検証すると、小規模織物商と機業者との間の掛売り関係では、経営基盤の強くなった織物商は、こうした関係にほとんど依存しないという。零細機業者が1人暮らしの老齢女性に家内労働を委託するなど、互酬的労働慣行も見られるが、例外的事例といえる。[職人や工房の貸し借りなど、経営者間に相互扶助が見られるフィリピンの鍛冶産業とは様相が異なる。]

8.農業の発展が人口増加を上回る食糧の増産を実現し、より多くの人が農村内非農業部門に従事できるようになった。他方、土地の価格が上昇し、農村内非農業への投資が有利になった。また、非農業が収益性において、農業に劣らないことも農民は知ることになった。さらに、仕事の配分を自分で決められるので、農業労働者より、独立した機業者を望んだ村民もいた。[農業と非農業部門との関係に関する興味深い論証である。]

9.農村企業は輸入品や大企業製品との競合関係の中で、賦存技術や資本、労働力を適切に組み合わせ、分業関係を組織し、転換している。農家兼業や農業労働需要のパターンに適応した企業とも言える。さらに、「利潤概念の薄い家族経営」によっても成り立っている。よって、農村工業化過程で、発展できる企業が無前提に近代的だとは言えない。[フィリピンの地場産業についても、生産者は長期的戦略を

立てず、家族第一で、その日暮らしという分析がある。利益が上がると生産活動に投資せず、家族の住宅を増築したり、家電製品を買ったりする。ただし、評者が鍛冶や魚醬（塩辛・魚醬油）産地で調べた範囲では、産業の行く末を案じ、共同組合や生産者組織を結成する動きもある。こうしたポジティブな動きを促進した価値観がフィリピン社会に存在する。インドネシアではどうだろうか。]

10.農村織布業は農村内の所得分配を平準化させているが、土地所有で見た階層序列を変化させるには至っていない。[フィリピンの地場産業では、経営者間の所得平準化は進んだが、従業員、労働者は出来高制度で賃金を受け取り、その所得水準は低い。]

11.隣近所、隣組、集落区、集落、行政村、周辺地域という単位は産地の経済ネットワークの社会的基盤と言え。親族、近隣者との互酬的關係や、信用取引を可能にする、近隣者や産地内の人々との信頼関係、有力織布商人による商人グループなど共同経済関係もあり、これらがビジネス網の基礎になっている。[フィリピンでも親族、近隣関係、宗教ネットワーク、産地間の人間関係など社会関係が経済行為と切り離せない。地場産業、市場（いちば）交易だけでなく、大企業経営でも、親族、血縁、人脈は脈々と生きている。]

### III 若干のコメント

最後に若干のコメントを付け加えておきたい。

第4章によれば、インドネシアでは、1990年代以降、NGOや、イスラーム組織、民間企業が農村工業支援で先導的役割を担ってきたという。フィリピンでは、製造業へのNGO支援はほとんど見られない。NGO支援はサリサリ・ストア（よろず雑貨店）、養豚、養鶏など、生計事業中心である。

また、若干の注文をつけさせていただきたい。まず、インドネシア経済や農村工業の国際経済上の位置付けをもっと論じていただきたかった。APECやAFTAなども一部触れられているが、貿易自由化の影響は織布産業にも及んでいないのだろうか。あ

るいは他の農村工業ではどうか。さらに、インドネシア経済の概要にも触れていただけるとありがたかった。特に、多数進出している外資系企業は地場産業に何らかの影響をもたらしていないだろうか。農村工業が外資や大企業に対して、従属的位置にあるのか、あるいは独立して、「二重経済」的に存続しているのか。その辺の見取り図に触れていただけると、農村工業の国際・国内的位置がよりわかりやすいのではないだろうか。

また、本書は織布産業の分析を通じ、農村工業の現状、展望を論じているが、比較事例として、他の業種も少し紹介していただけたらどうだったか。調査村の菓子製造など他の業種にも触れていただければ、織布産業の特徴がより浮かびあがったのではないか。

さらに、「農村工業」という概念に関して、市街地や都市部にある工業をどう考えたらよいか。本書の研究対象は「農村工業」であるが、地場産業という用語の方が、日本の地場産業論という社会的分業や、インドネシア研究者の「コミュニティ・デベロップメント」の概念になじむように思われる。

最後に、著者はインドネシア経済の立ち直りが困難ななか、原材料の輸入や銀行からの貸し出しへの依存が少ないため、農村工業は大企業より足腰が強く、雇用の受け皿になったり、物価上昇を押さえる役割を持つことが期待されると述べている。地域に根ざした経済活動や、地域や地方の内部循環を重視した地域経済システムを再評価することにより、国際的に開かれた体制を維持しながら、外国からの資本の流れに過度に依存しないシステムへの転換が必要だとも主張する。同感であり、評者も「もう一つの発展論」の立場から、拙著で地場産業の発展に基づく自立的経済の展望を論じた。ただし、本書でい

う「国際的に開かれた体制」とは何か、あるいは「過度に依存しない」とはどの程度か、極力明らかにすべきだろう。

#### IV 比較共同研究・実態調査へ

アジア通貨危機後3年を経て、インドネシア、フィリピン、さらに、タイ、マレーシア等を含め、地場産業、村落工業の果たす役割、一国や地域の「発展」に貢献する可能性を改めて検討すべき時が来た。上述のように、足腰が強く、地域に根ざした経済活動が注目されるべきである。マクロ経済ばかりでは、アジアの経済は捉えられない。草の根の経済活動の実態を踏まえ、より公正で、民衆の利益を実現する経済計画、活動が実現されなければならない。こうして、東南アジアの地場産業という視点から、「もう一つの発展」を考えていく。そのために、具体的な比較研究共同プロジェクトや一層の実態調査が求められる。その意味でも、本書のような労作は価値があり、注目される。今後とも、東南アジア諸国、地域に関して綿密な実態研究が望まれよう。

#### 文献リスト

##### <日本語文献>

- 佐竹真明 1998. 『フィリピンの地場産業ともう一つの発展論——鍛冶屋と魚醬——』明石書店。  
山崎充 1977. 『日本の地場産業』ダイヤモンド社。

##### <英語文献>

- Geertz, Clifford 1963. *Agricultural Involvement: The Process of Ecological Change in Indonesia*. Berkeley: University of California Press.

(四国学院大学社会学部教授)